

「追悼会」を迎えて “散る桜 残る桜も 散る桜”

これは、良寛の辞世の句といわれています。あの方も散っていかれた、この方も散っていかれたと、いつも眺めているばかりの私でした。しかし、残った桜も30日も咲き続けていません。間もなく散っていくのです。かつては、良寛といえども、残る桜として枝にしがみついていたのですが、いつの頃からか、ともどもに散っていくのだと、そのとらわれから開放されていかれたことでしょうか。良寛の目には、桜と一体になった良寛自身を見ていられたのです。辞世の句に悟りの風光がみてとれます。



老少不定とか、会者定離とか、諸行無常とか、悲しい席で語る言葉ですが、なかなか自分に即しては語っていないようです。あくまでも、亡くなった人に対してであって、私自身のことではないのです。そこに抜きさしならない頑迷さがあります。

どのようにすばらしい業績をあげている人でも、どのようにすばらしい名誉を手にしていても、それだけにとらわれている人であれば死を待つ人と同じです。

法句經に「もし百年を生きたとしても すぐれた法を知らないならば
それを知って一日を生きるに越したことはない」

とあります。その意味をかみしめてみたいものです。

今回の追悼会は、多くの方々に追悼・思慕することになります。死を待つ消極的な生き方でなく、生死を超えていく積極的な生き方に転ずる機会にすることこそ、追悼会の迎え方ではないでしょうか。

開校記念日の由来

旭川龍谷高等学校の創始者であり、慶誠寺三世住職、故石田学而先生は幼少の頃から大きな夢をもっておられました。それは将来、教育事業をしたいという壮大な理想でした。

この夢に影響を与えた人物は、御尊父である慶誠寺二世住職、石田慶封師です。師は早稲田大学文学部を卒業後、本願寺開教使として海外で布教活動をされ、ハワイにおいても開教総長としてホノルルに親鸞聖人の御教えを宣布されました。国内においては大正15年、本願寺派教師養成のため仏教学園を創設され、自ら院長として宗教者の育成に意を注がれました。趣味では俳句を良くし、高浜虚子の直門であり、号を雨圃子として北海道の俳句界に名をとどろかせました。

親鸞聖人の御教えを後世に伝え、「人を育てる」という御尊父である石田慶封師の志を受け継ぎ、昭和32年、宗祖親鸞聖人700回大遠忌記念事業に合わせ、仏教精神を基調とする旭川龍谷高等学校が設立され翌33年4月、第一期生を迎え、ここに「人柄の龍谷」の歴史が始まりました。

石田慶封師は昭和27年1月13日に遷化されましたが、初代石田学而理事長は昭和35年、御尊父である慶封師の遺徳を偲び、また、ご母堂が愛でられていた花が美しく咲き季節も良くなる**6月の13日**を開校記念日に定められました。

私たちは龍谷高校とご縁があったから、仏教に接することができるのではないのでしょうか。生徒・教職員であるから、親鸞聖人の御教えに直接ふれることができるのです。

今一度、心静かに縁あるものがしっかりと合掌し開校記念日の由来を通じて生かされていることを実感いたしましょう。